いきいき通信

広報誌：第 69 号　令和 6 年 1 月 9 日発行
発信元：〒９９９－８３０１
山形県飽海郡遊佐町遊佐字石田７
順仁堂　遊佐病院　『広報委員会』
ＴＥＬ　０２３４（７２）２５２２
ＦＡＸ　０２３４（７１）２８６５
ＨＰ　http://www.yuza-hospital.jp/
メールアドレス　info@yuza-hospital.jp

一人ひとりのワーク・ライフ・バランス

副院長兼看護部長　信夫 松子

当院が、ワーク・ライフ・バランス（WLB）の推進に取り組んで 10 年になります。職員採用面接の際、「ワーク・ライフ・バランスに魅力を感じました」と多くの方々が口にされ、ありがたいなと思います。高校の家庭科の教科書にも「ワーク・ライフ・バランス」について記される時代になりました。

しかし、最近、私は、この「ワーク・ライフ・バランス」が正しく理解されているのだろうかと疑問に思うことがあります。「ワーク・ライフ・バランス＝ゆるい職場」「子育て世代の優遇策」「仕事と生活が半分・半分」などと、誤解されていることを耳にするからです。

「ワーク・ライフ・バランスが実現した社会の姿」とは、「一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、家庭や地域生活などにおいて、子育て期、中高年期といった人生の各段階に応じて、多様な働き方が選択・実現できる社会」と内閣府のワーク・ライフ・バランス憲章にあります。一時点ではなく、生涯を通して、一人ひとりがその違いを認め、一人ひとりの生活を尊重する。

職場では「おたがいさま意識」が作り上げられていくことが大切であり、「ワーク・ライフ・バランス」についてきちんと伝えていきたいと思います。

日本看護協会ホームページより

「ダイヤモンドスマイル企業」に認定される

当法人は、かねてからワーク・ライフ・バランスの推進そして女性活躍の推進に積極的に取り組み、働きやすい環境づくりを目指してきました。この度、やまがたスマイル企業の最も高いランクである「ダイヤモンドスマイル企業」として認定されました。これは“女性の活躍推進”や“仕事と家庭の両立支援”などに取り組む企業のうち、県が定める一定の基準を満たした企業を、取り組みの段階に応じて山形県知事が認定するものです。

これからも、職員が一丸となって協力し合いお互いを尊重することを土台に職種横断的な業務の見直しをはじめ職員の健康支援などに取り組み医療の質を高め地域に貢献していきたいと思います。

やまがたスマイル企業
DIAMOND

新年を迎えて

順仁堂遊佐病院　院長　佐藤　卓

明けましておめでとうございます

あけましておめでとうございます。 令和も六年を迎えました。 皆様良き年越しをされたことと思います。 そして新たなこの年が実りある良き一年になるようにと希望されていることでしょう。昨年は気候変動の激しい年でした。 特に、気象庁が統計を取り始めた 1946 年以来、夏の平均気温が過去最高を記録したことはまだ記憶に新しいところです。 それはまさに酷暑といえる夏でした。 短い秋が過ぎ冬となり新年を迎えましたが果たして、一月からの気温はそして降雪はどのようになることでしょうか。

昨年にコロナ感染は第五類の規定となりました。 ワクチンの種類も進んだこともあり患者数もようやく減少してきております。 しかしながらまだまだその予防策に手を抜くことはできません。 年末にかけて少なくなったとはいえ、感染者はいまだに外来受診されております。 病院といたしましては今後も引き続き、精一杯の努力をするべく覚悟を新たにしているところです。

世界ではいまだに戦火が途絶えておりません。 貧困と飢餓に苦しむ人々も多くを数えます。 日本におきましても様々な社会不安が消えることがありません。 政治や経済面での問題もさることながら、我々医療人にとっての直近の大きな懸念は四月からの診療報酬改定です。 国民皆保険制度の下での二年に一度の改定なのですが、今年は介護・障害福祉サービスの改定も加わり六年ぶりのトリプル改訂となります。 病院を預かる院長といたしましては政府の方針が大いに気になるところです。医療機関を支えること、それによりしっかりと地域の医療、福祉、介護を守るために為政者の英断が望まれるわけです。

そして昨年中に、医者である私にとって気になったことが一つあります。 それは過労死であるとみなされた一人の若き研修医のことでした。その誘因となった時間外勤務が、一ヶ月で 200 時間を超えていた事実には私も同情を禁じおえません。 彼はまだ 26 歳でした。 過重労働については若き日の私も、修行時代には似たような経験をしております。医師になって 10 年ぐらいの間は、医療知識や技術の習得に一日 24 時間では足りないとの実感がありました。 体力の限界まで頑張れたのも、臨床経験の積み重ねが何よりも重要だとの認識があったからなのでした。 当時先輩がよく言っておりましたことを思い出します。 医者はとにかく体力勝負だとの弁でした。 現在の私にはそれが良くわかります。 医療の場とはいえ大学や研究所などの競争原理の働くその世界の中では、ゆっくりと構えている間は全くありませんでした。 米国ヒューストン市の癌研に在籍し土日も実験を繰り返していた時、ボスにあきれ顔でいや同情の目でこう言われたことがあります。 まさにワーカホリック(仕事中毒)の J・J ラインだねと。 多国籍の研究者が集っていた研究所の中で、「家庭生活を犠牲にするほどに頑張って業績を上げようとしているのはジャパニーズ(日本人)とジューイッシュ(ユダヤ人)だけだよ」とのことでした。 私も今つくづく感じています。 知力は勿論ですがやはり医者という職制は体力が必要とされるのだと。 もちろん医者として勉強は一生涯必要です。 しかし年齢とともに気力や体力が衰えることは否めません。若い頃のがむしゃらさは次第に維持できなくなってくるのです。 すると昨年秋になって一つの朗報が飛び込んできました。 厚生労働省が令和 6 年 4 月から、医師の働き方改革を推進するとの施策を提示したのです。 これはすでに喧伝されて久しい職場での WLB(仕事と家庭生活の両立)の、次に発展させるべき問題提起だと私は思いました。 これはすなわち医師版 WLB の実践の端緒となるはずです。 医師を含めた医療人のストレスのない勤務形態の推進は、必ずや患者様の利益として反映されること必定と考えます。 是非皆様には応援していただければと願うところです。

では今年も健康に留意して頑張ってまいりましょう。 どうぞよろしくお願いいたします。

秋季防災訓練

令和 5 年 11 月 22 日、当院で秋季防災訓練を行いました。第 1 部、夜勤帯における火災訓練として責任番の指示訓練及び消防への通報訓練。そして夜間火災時の避難誘導。水消火器を使っての消火訓練を行いました。第 2 部は水害時の避難訓練として担架を使用しての下階から上階への避難訓練を行いました。

担架での避難訓練を実際にやってみたスタッフからは、二人で持ち上げることの大変さを実感したと感想があげられました。また、定期的にマニュアルやアクションカード、必要物品、持出し用品、備蓄、連絡網等の見直しや物品の保管場所の確認も必要だという感想などもあげられました。

平時は危機感を持ちづらいようですが、訓練の積み重ねによっていざという時はあせらず実践できる訓練を今後も行っていきたいと思います。

お知らせ

1月末に当院のホームページをリニューアルいたします。いきいき通信もホームページでご覧いただけるようになりますので、そちらでも是非ご覧ください。

ドイツの旅。Karlsruheから Hannover、Bad Pyrmontへ、など。

副院長、麻酔･疼痛緩和科　佐藤　裕

第一報でお伝えした ESRA world　最終日は 9 月 9 日（土）。前の晩の 8 日（金）にラグビーワールドカップの開幕戦がパリ郊外で行われ、フランスがニュージーランドのオールブラックスを破ったので、テレビでも大々的に報じられ、にわかに盛り上がっていました。ホテルのフロントの人の話では、サッカーと比べるとラグビーはフランスではマイナーなスポーツで、南フランスの方が盛んで、日本チームが出場するトゥールーズ辺りがフランスのラグビーの本場だそうで、あまり一般の関心は高くなかったのが、開幕戦でフランスがニュージーランドに勝ったので、にわかに注目されるようになった、と言ってました。

繰り返しになりますが、ESRA world が 9 月 9 日（土）の午前中で終わり、午後の列車でパリの東駅からTGVというフランスの新幹線でドイツの Karlsruhe まで行きました。乗車券は例によってQRコードの e-ticket でした。フランスの鉄道は定時運行しないのが前評判でしたが、ほぼ定時運行でした。国際（フランス―ドイツ）列車で、ドイツの国鉄（DB）との共同運航の形をとっていました。ドイツの Karlsruhe はドイツの黒い森地帯の一角にある保養地で、王様 Karl の休んだ場所（Ruhe）、というのが町の名前の由来です。

この町には有名な国立音楽大学（Musikhochschule）があり、私の妻、玲の留学仲間でピアニストの韓　伽倻（Prof. Kaya Han）さんが長くピアノ科の教授を務めていました。
彼女は在日 2 世の韓国人で、京都の堀川高校音楽科、桐朋大学音楽学部卒でその後西ドイツ（当時）のフライブルク国立音楽大学へ留学し、その後 Karlsruhe 音楽大学で現職を務めていました。玲とは留学以来の仲でした。韓さんは世界的に活躍し、日本でも頻繁に各地で演奏会を行い、酒田市にも何度も訪れて演奏会を開きましたので、お耳にした方もおられると思います。残念ながら韓さんは一昨年宿痾に倒れられ、現地 Karlsruhe と父君の故地である韓国済州島にお墓があります。今年 3 月に玲を含む日本の知人 10 数名で済州島を訪れ、墓参を果たしました。今回は Karlsruhe の墓参をする目的で初めて訪れたのです。

翌日、Karlsruhe からDB（ドイツ国鉄）の ICE(ドイツの高速鉄道、日本の新幹線に当たる)で 4 時間ほどかけて Hannover 市に向かい、同地の医科大学（Medizinishes Hochschule Hannover, MHH）麻酔科の名誉教授 Bernhard Panning（ベルンハルト・パニング）教授ご夫妻をお尋ねしました。パニング教授は麻酔科学のみならず、医学史学がご専門で、私の母校弘前大学麻酔科学教室の客員として 4 年前までほぼ 2 年毎に来日され、また日本国内各地で講演なさっておられました。遊佐病院にも 2018 年 6 月 12 日に訪問なさり、職員を対象に講演頂いたことは記憶しておられる方もいらっしゃると思います。

この時は、1840（天保十一）年にフランス人の軍医が、我が子のジフテリア感染による窒息を防ぐために自ら気管切開を行って世界で初めて救命した、という例を紹介され、最後に遊佐町の本願寺にある順仁堂の開祖、佐藤意泉の墓標の傍らに建つ、同じジフテリアで8歳で夭折した娘おかね（1883（明治十六）年没）の墓標も紹介して下さいました。

パニング先生ご夫妻のおられる Hannover は、首都ベルリンと旧西ドイツの首都、ボンの中間位にある人口 50 万人位の年です。Hannover の王様の子孫が、現在の英国王室の主君になったので、かつて英国王室はハノーバー朝と呼ばれていました。（初代の王様は英語がほとんど話せず、ドイツ語一辺倒だったそうです。「ハレルヤ・コーラス」で有名なドイツ生まれの作曲家ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデルが、イギリスに移住してジョージ・フレデリック・ヘンデルとなったのも、イギリスの王様が元々はドイツ人だったからです。それが第一次世界大戦で英国とドイツが戦争したので、イギリス王室の名前もハノーバー朝からウィンザー朝に変えたのです。）
ハノーバー市も第二次世界大戦で連合軍の空襲で大きな被害を受け、戦後は見本市や万博を開催する都市となりました。（広島市とハノーバー市は姉妹都市です）パニング先生のお勤めだったハノーバー医科大学は、戦後に建てられた単科の医科大学です。生体肝移植のヨーロッパの中心の一つで、私も母校弘前大学で外科学教室が平成6年に生体肝移植を始めた時、生体肝移植の麻酔管理を研修するために前の年、平成5(1993)年秋に派遣されて以来の関係です。

今回は Hannover 市の近郊にある、古くからの保養地である Bad Pyrmont(バート・ピュルモント)を案内して頂きました。

ドイツの温泉場は、湯あみだけでなく、温泉を飲むことで健康を回復する効果があるとして、ドイツの健康保険では医師が「温泉地で療養 1 か月間」などと処方することが認められていて、各地に古くから知られる温泉地があります。Bad Pyrmont はドイツ（当時のプロシャ）の王宮の王侯貴族を始めとしてオランダやベルギーの王族たちが逗留したことで知られ、また著名人も多く、文豪ゲーテなども訪れたことが記録にあります（ゲーテはプロシャ宮廷の大臣の一人でもありました）。王侯に従った侍医の中には日本でも知られた Hufeland(フーフェラント)などもこの地の温泉源に名を残しています。ヴィルヘルム・フーフェラント(1762～1836)はベルリン大学の教授を務め、著書「医学全書」のオランダ語訳が幕末の日本に長崎を通じて輸入され、緒方洪庵による和訳書は「扶氏医戒」全 30 巻の名前で知られ、その抄訳とともに当時の日本の医師に多大な影響を与えた人物です。

現代の Bad Pyrmont は施設の多くが市の所有となり、広大な城や植物園が資料館、博物館として公開されていますが、温泉地・保養地としての機能も健在で、町行く人の多くがスキーステッキをついてウォーキングしたり、車いすで歩き回っていて、股関節や膝関節の手術後に主治医の処方箋を貰って「療養」に来ている人だと一目で分かります。入浴が主体の日本の「温泉場」との違いはありますが、温泉を積極的に医療・介護に活かす工夫は見ならうべき点があると感じました。

ビルロートの親戚宅訪問

現在は医切除術も内視鏡やロボットで手術する機会が増えてきましたが、Billroth(テオドール・ビルロート、1829~1894)という名前は、外科学を学んだ人には耳馴染みがあると思いますが、ドイツ出身のウィーン大学の外科学教授で、世界で初めて開腹して胃癌の摘出手術に成功した人です。私が医学生として外科学を学んだ当時、胃切除術の方法はビルロートの第一法、第二法と呼び習わしていて、外科医であった私の父、当院の第二代院長、佐藤克也も「今日はビルロートの第二法で手術をした」などと語っていました。ビルロートは北ドイツのハンブルグ出身ですが、ドイツのゲッティンゲン大で医学を学び、スイスのチューリヒ大学からウィーン大学の外科学教授になった人です。その彼が学生時代、親戚のいるバート・ピュルモント近くの村に夏休みに訪れていました。パニング先生は、そのビルロートの親戚のご家族とも知り合いで、今回連れて行っていただきました。親戚の姓である Steinfelder さんは日本語で「石原」さんという意味で、弘前大学の麻酔科の同僚に石原先生がおられ、Hannover 医科大学へも何度も講演に訪れていましたので、パニングご夫妻はその偶然を面白がっておられました。当のビルロート先生はビオラの名手でもあり、同郷の作曲家ブラームスとも親しく、ブラームスが彼に捧げた作品もあります。ご親戚の「石原」さんも素人ながら音楽を愛しておられ、奥様はピアノや縦笛を演奏なさいます。

おわりに

駆け足で今回のフランス（パリ）とドイツの旅をご紹介しましたが、帰国予定の 9 月 15 日（金）は、フランスの航空管制官のストライキが予告されていて、48 時間前にならないとストを決行するか、交渉が妥結して回避されるかが分からず、不安でしたが、二日前の深夜に玲のフランス人の友人が、ヨーロッパで普及している Whatsup（ワッツアップ、英語で「今どうしてる？」という意味の俗語から来ている）という SNS で、回避されたことを知らせてくれ、一安心で帰途につけました。日本では東日本大震災以来、LINE が SNS の代名詞になって普及していますが、欧米では Whatsup が最も普及しています。今回、パリについてから現地の人に勧められ、初めて Whatsup をスマホに入れましたが、その役に立つことは目を見張るばかりでした。最早、スマホを使いこなさないと外国旅行も安心して出来ない時代になっている、と強く感じた旅でした。

←Bad Pyrmont の並木道　中央の背中はパニングご夫妻と玲。

↑Bad Pyrmont の中心にある「公園宮殿」。源泉の一つがドームの下にある。
画面左下に立つ人が、遊佐病院や杉の子幼稚園も訪れたことのあるパニング先生。